

埋葬すべしと。故に遺言に任せ、墳墓をば茶臼山の一高峰に築く。依りて世人此の高峰を勘兵衛塚と呼べりと。平次按ずるに、由比勘兵衛は元祖勘兵衛が事ならんか。家譜を見るに、元祖勘兵衛光清は本國駿河由比の産にて、由比大隅の長男なり。幼少の時父大隅の了簡に不叶とて、出家爲致置ける處、成長後武士と成り、織田信長公に奉仕し、每戰武功を顯したり。然りとていへども、長後合戦の時軍法を背き先登す。依りて勘氣を蒙り流浪す。後加州に來り、瀧祖大納言利家卿に仕へ、鐵炮足輕三十人を預けられ、足輕大將たりしかど、能州末森後援の後、故ありて祿を辭し退去せんとするに、利家卿の氣色に違ひ、奉公を構はれ京都に流牢す。利長卿の時再び召返され、家秩四百石を賜はり、利常卿の時金の番取役を命ぜられ、寛永十年歿す。二代勘兵衛定清、父の遺領配分知を賜はり、正保三年山奉行を命ぜられ、延寶五年小松定番馬廻番頭に命ぜられ、翌六年歿す。とあり。按ずるに、山本基庸の微妙公夜話録に、由比勘兵衛山奉行を勤めける時、野田山に松を根廻しいたし置けるを聞付け、見分に罷越しけるを、松の木取りに參る者數

十人有之、迷失せけるを兩人召捕り歸り詮議する處、本多安房守の家來也。何卒下にて事濟むやうにとの事なれ共、勘兵衛承諾せず禁籠になしたり。其の頃利常卿江戸より歸城し給ひ、勘兵衛を小松へ召され、奉公向情に入由被仰出、其の比までは彦市と稱し、亡父勘兵衛の次男なるにより、配分知百石賜ひける處、二百石の御加恩にて、都合三百石賜はり、名も勘兵衛と改むるやうにと被仰出と見え、享保録には、土清水に見事成る松木有之、本多安房守邸地へ取寄せ爲植度由にて、家來宮崎主馬と云ふ者へ申付け、足輕井に人足共多く指遣し、こがせ候處、近在の者共より勘兵衛へ及案内けるに、勘兵衛下人に長刀爲持、早速其所へ罷越し咎めける處、勘兵衛の勢ひに恐れ、皆々逃散りたる内、足輕兩人を召捕り、勘兵衛の宅へ連來り吟味しけるに、安房守家來なるよし申顯し、籠舎申付けたり。然るに利常卿歸城し給ひ、勘兵衛を小松へ被召、奉公向入情の段御意にて、二百石御加増被仰付、向後隨分情に入可相勤。併し勘兵衛小身者なるゆゑ、山々相廻りける砌、末々の者あなどり申者も可有之間、鐵炮二挺被下置、若し及違背者共候は

ば、當座に打殺候様被仰出。依之其以後は、山々廻りける砌必ず鐵炮を先に立て、火繩を挟み、及違背者共は必ず打殺すべき勢ひなるゆゑ、彌、松山の縮厳重に相成りけり。扱彼松木は、安房望の躰に候間可被下、勝手次第引取候様即日被仰出とあり。又山本基庸の夜話録に、此時亡父勘兵衛大坂陣の時分、榮螺の張懸の鎧指上、則陣中にて一度召され、其後返し下さる。右鎧于今有之哉と御尋に付、私儀幼少にて父相果候ゆゑ、委細の儀は不承候へども、榮螺の張懸の鎧は所持仕由申上げ、る處、取寄せ御覽に入るやうにとの御意なるに依て、則取寄せ入御覽けるに、成程此鎧なり。隨分秘藏仕るべしと御意にて被返下、今以家實となしたり。とあり。按ずるに、二代勘兵衛山奉行を勤めける頃の書簡は、改作所舊記に彼是載せたり。

### ○勘兵衛塚怪談

續咄隨筆に云ふ。寶曆二年の春、勘解由殿町轡師卯平次なる者、酒友四五人を誘ひ、花の盛を見んとて、酒肴を僕に荷はせ、春日山へ行きしが、花の詠めは我ばかりかは、恰も市中の如くいと騒々しきまゝ、いざや閑なる處へ往き

て心よく酔はんとて、勘兵衛塚へ登り、窪みたる木陰に鼈打敷き、小筒取いだし、うららかなる氣色に乗じて酒氣十分に満ち、西日白搗が如く成りしかば、いざ歸路に赴かんと、小筒を仕廻ひなどする内、六七歳許の小兒、いづくより出來りしにや、花色の木綿わた入を着し、古伯嶋（讀地）の帯をしめ、人々の前をいそがしく通りけり。もはや黄昏なるに、小兒のかゝる處へ來るべきに非ず。連れ人も見えず。定て迷ひ來しならん、不便也。いざ伴ひ歸らんとて、呼べども更に聞かざることく、山奥指して走りけるゆゑ、僕尙も跡より追懸くるといへども、其疾き事矢を射る如し。興覺めて歸りしが、何やらん氣味悪く、そこら手早く取片付け、いざ歸らんと立上るに、俄に臭氣鼻をつき抜くばかりに覺えし故、こは不思議と側を顧みれば、今まで休みし松の根の後に、いつ死せしやらん、朽爛れたる小兒の死骸、花色のわた入、古伯の帯を仕たるが、しかも裾形に春草に胸を付けたり。今見たりし小兒の着物に少しも違はず。人々毛孔ぞつとして、恰も水をそぐかと覺え、振返り見る心ちもなく、足を空にして立歸りしが、いかに希